コミュニケーション研究

石　丸　暁　子

0．序　　論

社会生活を営む生きものは，生命を維持するのに最適な社会を形成し，また社会活動を円滑に営むために，それぞれの構成員が互いにコミュニケーションし合っている。ある特定の種は，その種に最適なコミュニケーション環境の中で，食物を確保し，生殖をおこない，子孫を繁栄させている。このような日常的活動に不可欠な情報は，言葉・仕草・鳴き声・匂い等のコミュニケーション媒体によって伝達されている。

本論では，生きもののコミュニケーションについて，先ず，フォン・フリッシュ（von Frisch, 1967）が研究したミツバチの伝達構造を取り上げる。この報告によると，ハチのコミュニケーション・システムはかなり複雑な構造を有し，複数の情報を伝達できる。そこで，どのような構造がどのような情報伝達に用いられているのかについて紹介したい。

次に，本論の主題である人のコミュニケーションについては，非言語的なものと言語的なもの双方を論じるが，先ず，日常使用されている非言語的なものとして，Hall（1966; 1976; 1983）や Birdwhistell（1970）の研究を紹介しながら，異文化間の非言語的相互作用（nonverbal interaction）を研究する。今回取り扱う課題は，主に，社会空間に占める人の位置，身につけている衣服，仕草などによる非言語コミュニケーションについてである。

次に，現代社会の言語的コミュニケーションとして取り上げるものは，異民族・異文化間のコミュニケーションについてである。急速に進展する国際化に伴い，異なった宗教社会文化的背景を有する大小さまざまな民族集団が共生する社会は，コスモポリタンの大都市のみならず，地方にまで拡大してきている。これら多民族・多文化社会では，その当該社会の共通語によって，

異文化の人々がコミュニケーションを図っているが，話し手の宗教社会文化的背景の違いによって，コミュニケーション・スタイルが異なっている現象が観察される。このような異文化混成社会でのコミュニケーション・スタイルに焦点を当て考察する。

では，次章では，生きもののコミュニケーションの具体例として，ミツバチのコミュニケーションの仕組みについて紹介したい。

1．ミツバチのコミュニケーション

コミュニケーション（communication）は，およそ社会生活を営む生き物であれば，すべてが行っている生命活動であると言える。その一例として，ミツバチがその社会で行っているコミュニケーションを挙げることができる。

フォン・フリッシュ（von Frisch, 1967）によるミツバチの研究は，ミツバチが複雑なコミュニケーション・システムに支えられた社会を構成していることを明らかにした。斥候バチが，豊富な密や花粉の在処を仲間のハチに伝達している様子を詳細に観察し，且つ綿密な実験を長年にわたって実施して，ミツバチのコミュニケーション能力を研究した。研究者であるフォン・フリッシュは，「可能性と蓋然性」（possibilities and probabilities）をもって観察結果を発表できるにとどまると，謙遜に研究結果を発表しているが，以下に，この研究から，ミツバチのコミュニケーションについて，斥候バチが密の在処を仲間のハチに伝達するシステムを紹介したい。

1．1　ミツバチのダンス

ミツバチが，密や花粉を豊富に集めたりする習性を利用して，養蜂家たちの仕事は成り立っているのだが，あの小さいミツバチがどのようにして大量の密や花粉を集めることができるのだろうか。どのようにして，仲間のハチに餌の在処を教えているのだろうか。このようなハチの習性は，随分昔から多くの人々に科学的好奇心を抱かせた。

スラーデン（F.W. Sladen, 1902）は，ハチは「匂い」を媒体としてコミュニケーションしているとし，嗅覚がそのカギであるとした。同様な考えを抱

いていたフォン・フリッシュは，砂糖水に群がるハチと，それを空にした場合に，ハチが飛来しなくなる様子を観察し，ハチのコミュニケーションの不思議に関心をいだくようになった。そこで，ガラス窓のある観察用巣箱を用意し，ハチのコミュニケーションの様子を観察し始めた。その実験の結果，餌の種類，すなわち砂糖水又は密の場合には「円形ダンス」，花粉の場合には「尻振りダンス」，(von Frisch, 1923) をすると報告した。が，「尻振りダンス」は，餌の種類とは関係のないことが報告された (Henkel, 1983)。更に長年にわたる実験と試行錯誤の後，「円形ダンス」は巣から近い餌に対してなされ，「尻振りダンス」は巣から遠い餌に対して，同時に，飛行する方向をも伝達する手段として行われていることが判明した。

上述の観察に先立つこと100年前に，ハチのコミュニケーションに気づいていた報告があった。ウンホッホ（Unhoch, 1823）は，ハチのダンスが別の仲間へ伝達されていく様子を観察しているし，更に遡って，牧師のスピツナー (Spitzner, 1788) は，ハチが，一回の飛行では，同一の花の蜜を集め，決して異なった花々の密と混ぜないことを報告している。これらの報告は，いずれも，ハチのコミュニケーション・システムにまで観察を深めるには至らなかったが，フォン・フリッシュの研究に手がかりを提供することになった。

フォン・フリッシュによると，花の蜜や花粉など豊富な餌を見つけた斥候バチは，ダンスで仲間のハチに伝達している。彼らは，帰巣した際に，２種類のダンスを使い分けて密の在処を仲間のハチに伝達する。即ち，密までの距離が10メートル以内であるか，又は，それ以上の距離であるかによって，円形ダンス（round dance）を行うか，尻振りダンス（tail-wagging dance）を行うか，２種類のダンスを使い分けているのである。

１．１．２　距離の伝達

フォン・フリッシュ等のミツバチの情報伝達に関する実験では，様々な工夫の施された異なった種類の観察箱を造り，冬季には，植物園(The Winterhalle of the Münich Botanical Garden）に観察場所を設けたりしながら，40年以上にわたって継続された。このような綿密な観察の結果，ダンスの構造が判明した。

1．1．2．1　円形ダンスの構造と機能

斥候バチは，帰巣して2種類のダンスを行う，即ち，円形ダンス(the round dance）と尻振りダンス（the tail-wagging dance）である。それぞれのダンスは，その構造と機能とを異にしている。

円形ダンスの構造は，ハチが円形の軌跡を一方向につくり，次いで方向転換し，反対方向へ同じ軌跡を円形になぞり，しかも，狭い場所内で数回繰り返される，というものである。ダンスするハチはしばしばダンスを止め，餌のサンプルを見物しているハチに渡す。ダンスするハチは，実験的に空にされた巣箱ではダンスを行わなかった。斥候バチがダンスをする誘因として，巣に仲間のハチが居ることが不可欠の要素のようである。下の図1は円形ダンスの構造である。

円形ダンスの構造の特徴として，次の3点が挙げられる(Akmajian *et al.*, 1979: 10-11)。

a．円形ダンスは，餌が10メートル以内にある場合に使用される。

b．ダンスの激しさ（intensity: speed and duration）は，餌の豊富さに比例している。

c．ダンスするハチの匂いは，餌の種類をリクルート・バチに伝える。

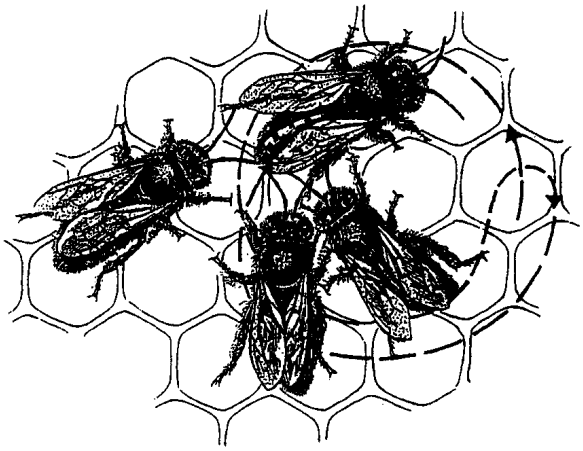


FIGURE 29. The round dance. The dancer is followed by three bees who trip along after her and receive the information.

(von Frisch, 1967: 29)

図1　オーストリア・ミツバチの円形ダンス

円形ダンスの機能は，巣の仲間のハチを餌のある場所へ誘うことにある。フォン・フリッシュの実験によると，匂いのある砂糖水をなめた斥候バチが，帰巣して強烈な円形ダンスをしたのを見た仲間のハチは，174匹中155匹が，この甘い匂いつきの砂糖水の餌場に飛来してきた。しかも，斥候バチが放つ匂いを手がかりとして，仲間のハチは餌場を素早く見つけた。

1．1．2．2．尻振りダンスの構造と機能

ミツバチは100メートル以上の距離にある餌場についての情報を伝達できる。1キロも離れた場所にある餌場を手当たりしだいに探すとすれば，3百万平方メートルもの面積を探さねばならないことになる。が，ミツバチはそのような無駄な飛行はしていない。

斥候バチは，垂直になっている巣の壁でダンスをするのだが，どのようにして，餌場までの距離と方向を，仲間のハチに伝達するのだろうか（同上，13-18）。

尻振りダンスは，真ん中に直線部分のある，左右に半円形をした軌跡をなぞるが，ダンス・バチは重力の方向を利用している。

主たるダンスのパターンは3種類ある。

(a) 太陽の方向へ地面に沿って飛行するよう伝達する場合は，斥候バチは真ん中の直線部分で「真っ直ぐ上向き」に尻振りダンスをする。

(b) 太陽とは反対の方向へ飛行するよう伝達する場合は，真ん中の直線部分が「真下へ向く」尻振りダンスをする。

(c) 太陽が右80度の方向にある飛行をする場合には，真ん中の直線部分から「80度左へ傾いた」尻振りダンスをする。即ち，太陽を目印とする飛行は，斥候バチの重力に基づいたダンスによって示されている。

図2のような尻振りダンスによって示される飛行の方向は，次のような実験結果からも，その信憑性が証明された。フォン・フリッシュ（1967）は，先ず，巣からの直線距離が250メートルの場所で，薄い砂糖水を用意した。次に，匂い油付きの濃い砂糖水を代わりに置いた。数匹の斥候バチが美味しい砂糖水

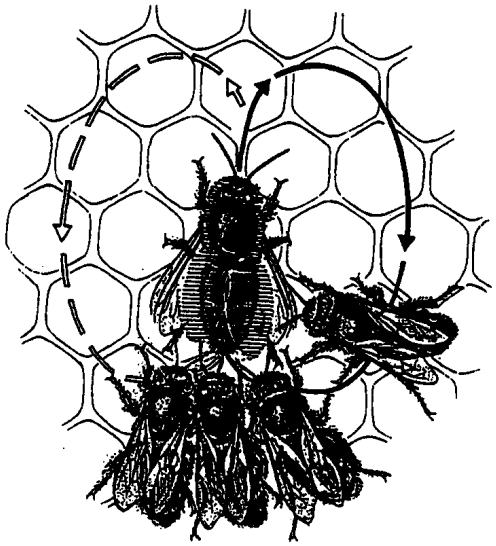


FIGURE 46. The tail-wagging dance. Four followers are receiving the message.

(von Frisch, 1967: 57)

図2　オーストリア・ミツバチの尻振りダンス

をなめて巣に戻ったのち，すぐにその餌を取り除いた。今度は，巣から200メートルの所に，同一の匂い油のカードを7枚設置した。真ん中のカードは，先ほどと同方向に据え，他の6枚のカードは，その両側に15度間隔で設置した。巣から飛来した仲間のハチは，真ん中のカードに一番多く，24匹飛来し，その15度左のカードに8匹飛来，それ以外のカードには，2，3匹のハチが飛来するか，両端のカードには，全く飛来しなかった。この実験からも，ハチが飛行の方向をかなり正確に，即ち，発見した餌から帰巣する際に飛んだ道筋を，帰巣してから，それとは反対方向への飛行航路を伝達していることが分かる。

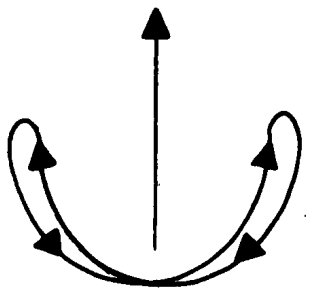
尻振りダンスの機能は，真ん中の直線部分で尻振りダンスをする際にかけられる時間の長さが，巣から餌場までの距離と比例しているようである。直線部分の尻振りダンスをしながらブーン・ブーンと特殊なうなり音を立てるが，この音の長さが距離に比例している，という報告もなされている。また，一定の時間の単位内で描かれるダンスの円の数も距離の伝達と関連している。一定の時間単位内に描かれる円の数が少なければ少ない程，直線部分での尻振りダンスに費やされる時間は長くなるので，餌場までの距離が遠いことを伝達することになる。例えば，15秒間に，9ないし10回の尻振りダンスの円が描かれる場合には，飛行距離は500メートル程だ，ということを示しているし，15秒間で，4回の尻振りダンスの円が描かれたとすると，飛行距離は，1500メートル程度である，ということを示唆している。これまでの実験では，ミツバチは，11キロメートルまでの距離を伝達できることが判明している（*Ibid.*: 17）。

1．1．3　方言

コミュニケーション媒体は，各共同体に固有の自由変異形がある。ミツバチのコミュニケーションにおいても同様のことが言える。斥候バチが仲間のハチへ餌の在処を伝達する際に，ダンスを用いることや，匂いを伝えたりすることにおいては同様であるが，ダンスの形態に違いが見られる。

先述の黒色オーストリア・ミツバチと同種のものに，イタリア・ミツバチがある。イタリア・ミツバチは，巣から10メートル以内の餌については，オーストリア・ミツバチ同様，円形ダンスを行うのだが，10メートルから100メー

トルの間にある餌については，草刈りガマような形のダンス（sickle dance）を行う。草刈りガマ・ダンスは，平たくした8の字のような半円形の軌跡をなぞるもので，その半円形の中心が餌場を指している。下の図3がそのダンスの様子を示している。



(Akmajian et al. 1979: 18)

図3　イタリア・ミツバチのダンス

イタリア・ミツバチは，巣から100メートル以上の距離にある餌の情報伝達のためには，黒色オーストリア・ミツバチと同様尻振りダンスを行う。但し，イタリア・ミツバチの尻振りダンスのテンポは，オーストリア・ミツバチのそれに比べると多少ゆっくり気味のようである。

イタリア・ミツバチとオーストリア・ミツバチが同一の巣に置かれ，イタリア・ミツバチがダンスで情報伝達すると，そのイタリアのダンスで，オーストリア・ミツバチは正確に餌場まで飛行できる。

このように，ミツバチにも共同体によって，情報伝達媒体の自由変異形，方言が存在すること，しかも，基本的な情報構造は変わらないので，異なった共同体のミツバチにも伝達が可能であることが分かった（*Ibid.*: 18）。

1．1．4　本能的コミュニケーション能力

ミツバチが情報伝達のためにダンスをし，巣の仲間のハチを餌場へ道案内する能力は，生得的なものである。フォン・フリッシュ（1957：525）によると，若いミツバチは，最初の飛行で，自分の羅針盤(compass)が正常に機能するように，太陽との関係を体験する。ほんの数時間，太陽の下で飛行することによって，このコンパスは正確に作動するようになる，と報告している。

ミツバチが餌場への飛行を繰り返して，正確に餌への飛行ができるようになるという学習も報告されているが，これ以上，情報伝達について学習することはないようである。

黒色オーストリア・ミツバチとイタリア・ミツバチとの混血種のダンスからも，そのダンスの本能的情報伝達の様子がうかがえる。混血種にイタリア・ミツバチの黄色い体のマークがあるものは，巣から餌場までの距離が10メートルから100メートルまでの場合，イタリア・ミツバチの草刈りガマのダンス

をするが，オーストリア・ミツバチに似た体色のものは，円形ダンスをした(*Ibid*., 1962: 80)。

以上の報告のように，ミツバチの情報伝達は，その種に本能的に生得的に備わっているもののようである。ミツバチ以外の生き物の情報伝達についても，科学的研究がなされた報告は数多く，霊長類の研究でも，動物と人とのコミュニケーションとの間には，確実なギャップがあるとしている。即ち，人には，言語によるコミュニケーション能力の発達があり，しかも，現場での出来事やモノについて伝達すること以上に，思考を伝達できるという点で，他の動物と大きく異なっているとしている。このような人以外の生き物のコミュニケーションについては，本研究では，この程度にとどめ，次に人のコミュニケーションについて考察したい。

2．人のコミュニケーション

人は自然界で生存し，生殖し，社会生活を営むために，コミュニケーションしている。人が，他の生きものと異なる点は，自然環境の他，宗教社会文化的環境の中で日常生活を営んでいることである。しかも，この宗教社会文化は，それぞれの共同体独自の慣習的特殊性を有している。いわゆる，「文化」と一般的に称されているものである。人々が構成する文化共同体によって，それらの人々のコミュニケーション体系は異なってくる。そこで，本章では，非言語及び言語のコミュニケーション体系を取り扱い，日本・アジア・欧米の文化的特徴に焦点を当てて考察する。

まず，非言語コミュニケーション体系を研究するに当たって，次節では，ホール(E.T. Hall, *Hidden Dimension*, 1966)，バードウイステル(Birdwhistell, *Kinesics and Context*, 1970)，フォン・ラフラー＝エンゲル(von Raffler-Engel, ed., *Aspects of Nonverbal Communication*, 1980) 等を参照しながら，文化の中で形成されていく人々の非言語コミュニケーションの体系について，異文化間比較を試みながら考察したい。

2．1　ノンバーバル・コミュニケーション

「ノンバーバル・コミュニケーション」(nonverbal communication) とは，いわゆる「ことば」によらない情報伝達の構造と機能とを体系的に研究する言語学の一分野である。ノンバーバル・コミュニケーションは，バーバル・コミュニケーション (verbal communication) と相まって情報伝達に使用されるのが通常であるが，コミュニケーションに占める非言語的情報伝達の果たす役割は大きく，バードウイステル (1970) は，伝達において言語が占める割合と非言語が占める割合を，30対70程度であるとし，その比重が大きいと報告している。

ノンバーバル・コミュニケーションは，準言語的なもの (paralinguisitic)，例えば，アクセント，ピッチの高さ，イントネーションなど，とジェスチャーや体の動き (body movement, or kinesics) などによる情報伝達を含む。これらの伝達は，人が，生後，自己の宗教社会文化共同体で生活するうちに，コミュニケーション体系の一部として，言語獲得と同時に，自然に獲得されるものである。ノンバーバル・コミュニケーションには，意図的に使用するものと，非意図的に自然に行われるものとに分けられる。これらノンバーバル・コミュニケーションは，それぞれの文化に固有なものであるので，ある主体が異文化の人に出会った場合，その非言語コミュニケーションが新奇なものに感じられ，違和感を覚える場合もある。先述のフォン・ラフラー＝エンゲル (1980) は，「挨拶の仕方では，日本では，西洋より動作の規則が定式化しており，丁寧な振る舞いに関する独特の行動ルールを持っている。そして，異文化の人と接する時には，寛大に同調するが，これは，相手を心地よくさせることが，自らの顔を立てることになるからであると思われる」，と記している。

以下において，ホール (1966) から，それぞれの文化に特有な主体間の距離の取り方について，バードウイステル (1970) から，成長過程におけるコミュニケーションの獲得について，フォン・ラフラー＝エンゲル (1980) から，ノンバーバル・コミュニケーションの諸タイプについて，それぞれ概要を紹介したい。

2.1.1 主体間の間隔

ホール (Edward T. Hall, 1966) は，著書『隠れた次元』(*The Hidden Dimension*) において，人の距離 (Distance in Man: 113-129)，異文化的状況における近接学，ドイツ人・イギリス人，フランス人(Proxemics in a Cross-Cultural Context: Germans, English and French: 131-148)，日本とアラブ世界 (Proxemics in a Cross-Cultural Context: Japan and the Arab World: 149-164)，という章を設けて，それぞれの文化の中で，人々がそれぞれどのように異なった距離をとって生活しているかについて研究している。

(1) ... people from different cultures not only speak different languages but, what is possibly more important, *inhabit different sensory worlds*. Selective screening of sensory data admits some things while filtering out others, so that *experience as it is perceived* through one set of culturally patterned sensory screens is quite different from experience perceived through another. In fact, from these man-altered environments, it is possible to learn how different peoples use their senses. Experience, cannot be counted on as a stable point of reference, because it occurs in a setting that has been molded by man (*Ibid*.: 2).

(2) The relationship between man and the cultural dimension is one in which both *man and his environment participate in molding each other* (*Ibid*.: 4).

上記(1)・(2)の引用から分かるように，ホールは，人が創造したものは，人の感覚でこしとられ残された部分であり，その文化的環境が人の感覚を形成しているという立場をとっている。従って，異文化の人たちが出会うと，異なった意識のレベルでのコミュニケーションが同時に行われる，ということになる (In *The Silent Language* I suggested that communication occurs simultaneously on different levels of consciousness, ranging from full awareness out-of-awareness. p.5)。

長い鎖国の後開国した日本では，西洋文化を積極的に取り入れようと努力したが，着物を洋服に着替えても，その行動様式は従来の習慣のままであった。明治中期の日本人を活写したフランスの画家ビゴー（野村，1994：23）は，鹿鳴館の舞踏会の小休止に，控えの間にさがり，「やれやれという顔でしゃがみ込み，きせるでタバコを吸う洋装で着飾った（芸者らしき）日本女性。」を描いている。西洋の貴婦人の服を纏った日本人女性が，床にしゃがみ込んでいる姿は，フランス人の目には，描き留める程に新奇に映ったことだろう。この事例のように，文化的環境によって形成された人の行動様式は，意識下の日常の行動として当該の文化を特徴づけるものとなる。

野村（1994：23）が指摘するように，「座る・歩く」姿勢は，文化特有のものがある。図4の小休止の場面では，「しゃがむ」姿勢は，通常欧米にはない。「立って」談笑するか，「椅子に座る」かのいずれかであり，欧米で「しゃがんで」いる姿は，社会的地位の低い者や敗者の姿のようで，ホームレスの人々が道端でしゃがむ，戦闘での敗者が勝者の前でしゃがむ，のである。

現代社会においても，野球場で，ゲートが開く時間を待っている間，アメリカの観衆は，立って談笑しながら長時間待っている。日本の観衆は，ビニールシートなどをコンクリートの地面の上に敷いて，座り込んでいる。同様に，列車が遅れた場合などにも，列車の到着を待つ間，尻餅をついて座り込んだり，膝を折ってしゃがみ込んだりする。イギリスでは，バスを待つ乗客は，長蛇の列になろうとも，辛抱強く立って待つ。このように，欧米と日本とを比較してみると，「立つ」，「座る」，「しゃがむ」という，日常的仕草に文化差があることが分かる。

●"排便スタイル"でくつろぐ鹿鳴館の洋装婦人（ビゴー画、漫画雑誌「トバエ」より）

（野村，1994：2）

図4　ビゴーの鹿鳴館小休止

「歩く」仕草にも文化差が認められる。日本では，長年「草履」や「下駄」を履く習慣があり，屋内では履き物を脱ぎ，素足または，足袋で畳に座る生

活である。「靴」を履く習慣は一般的ではなかったので，文明開化の折り，西洋文明と共に「靴」が紹介されて以来急速に普及したが，その歴史は未だ200年にもならない短いものである。一方，欧米では，「スリッパ」のような室内での履き物もあるが，伝統的に「靴」の生活を営み，屋内でも靴を履いたまま生活し，ベッドに入る時のみ靴を脱ぐ。このような，履き物の違いからくる，日本人と欧米人の「歩き方」の違いは，靴の生活に慣れた現代日本社会においても認められる。日本人は欧米人と比べて歩行中に足が持ち上がらないので，履き物を道路に「擦る」，すり足が一般的で，膝を少し曲げて「ズルズル」というすり足の音と共に，履き物の「かかと」を擦って歩く。欧米人は日本の街を歩くと，この「奇妙な音」に先ず気づき，「何の音だろうか」といぶかる。これに比べて欧米人の歩く姿勢は，靴と共に足が高く持ち上がるので，「カツカツ」というヒールの音を響かせて，大股で闊歩する。一般的に，歩行の際，背や膝は曲がらない。

以上述べたように，「座る」・「しゃがむ」・「歩く」姿勢にも文化差が認められ，異文化接触の際に，ノン・バーバル・コミュニケーションを無意識のうちに行い，これらの異なる姿勢を見て，一般的に，自文化中心的解釈をしがちな人々は，批判的解釈に陥りがちである。

2．1．1．1　人間の距離（The Distance in Man）

ある主体が他の人との間にとる間隔は，その主体が，その出会いの瞬間に相手に対してどのような感情をいだいているか，を表している。この事実をホールは次のように記している。

(3) It should be noted at this point that *how people are feeling toward each other* at the time is a decisive factor in the distance used. Thus people who are very angry or emphatic about the point they are making will move in close, they "turn up the volume," as it were by shouting. Similarly... as any woman knows－one of the first signs that a man is beginning to feel amorous is his move closer to her. If the woman does not feel similarly disposed she signals this by moving back. (Hall, 1966: 114)

ホールは欧米人のプライバシーの感覚について，次のようにアメリカ人・ドイツ人・フランス人・イギリス人を比較対照しながら記述している。以下の表において，プライバシーの領域の内にいると解釈するドイツ人とその外にいると解釈するアメリカ人を，同一の会話の状況を示して，相違を明らかに示している。

表1　アメリカ人とドイツ人の空間認識の差異

	プライバシー・領域（内・外）	
会話主体の状況	アメリカ	ドイツ
2／3人のグループが小声で会話	境界線あり・外	境界線なし・内
部屋のドアから顔をのぞかせて話す	侵害なし・外	侵害あり・内
部屋の中が非意図的に見える	侵害なし・外	侵害あり・内
非常時のバス・トイレの共用	可能	不可能
ドア	開けておく	閉めておく・外
家具	移動できる	移動できない

ドアについて，アメリカ人とドイツ人では，かなり違う文化的意識を有していることが次のエピソードから分かる。

(4) "If my family hadn't had doors, we would have had to change our way of life. Without doors we would have had many, many more fights... When you can't talk, you retreat behind a door. ..." (Hall, 1966: 136)

(5) The open-door policy of American business and the closed-door patterns of German business culture cause clashes in the branches and subsidiaries of American firms in Germany. ... In this company the open doors were making the Germans feel exposed and gave the whole operations an unusually relaxed and unbusinesslike air. Closed doors, on the other hand, gave the Americans the feeling that there was a conspiratorial air about the place and that they were being left out. (*Ibid.*)

(6) The orderliness and hierarchical quality of German culture are

communicated in their handling of space. Germans want to know where they stand and object strenuously to people crashing queues or people who "get out of line" or who do not obey signs such as "Keep out," "Authorized personnel only," and the like. (*Ibid*.: 137)

(4)・(5)・(6)の引用から，ドイツの文化では，ドアは主体の領域の境界であり，その内は整然とした秩序のある主体の城であるから，主体の許可なく侵入することは，主権の侵害にあたるのである。同様に，ドイツの家具がどっしりと重く移動できないのも，家具を移動させないことで部屋の秩序を図っている。これに対して，アメリカの文化では，ドアは中がよく見えるように開けておくもので，心の広さや仲間意識，連帯感，更に，正直さを表しているようである。家具は，主体に合うように移動するのが通常で，移動可能な軽量に造られている。

アメリカとイギリスは，ルーツは同一の言語を有する同一文化圏であったにも係わらず，今日に至ってはかなり異なっている。

表 2　アメリカ人とイギリス人の空間認識の差異

	アメリカ	イギリス
社会的地位	居住地域(スペース)	学校教育
子供部屋	個室	兄弟と共有
執務室	個室	共有
沈黙	自室	個人
電話	闖入とは思われない	闖入
近所	親しみ	無関係
寝室の主権	女性にあり	男性にあり
声高さ	高い	周囲に気配る高さ
視線	注視しない	注視する

上記(6)のように，イギリスとアメリカのそれぞれの文化では，私室についての認識が異なっているが，言語主体が「話しを聴く」時の視線についても，双方の文化では(7)のような相違が観察されている。

(7) For an American to refuse to talk to someone else present in the same room, to give them the "silent treatment," is the ultimate form of rejection and a sure sign of great displeasure. The English, on the other hand, lacking rooms of their own since childhood, never developed the practice of using space as a refuge from others. They have in effect internalized a set of barriers, which they erect and which others are supposed to recognize. Therefore, the more the Englishman shuts himself off when he is with an American the more likely the American is to break in to assure himself that all is well. (Hall, 1966: 140)

(8) The Englishman is taught to pay strict attention, to listen carefully, which he must do if he is polite and there are not protective walls to screen out sound. He doesn't bob his head or grunt to let you know he understands. He blinks his eyes to let you know that he has heard you. Americans, on the other hand, are taught not to stare. We look the other person straight in the eye without wavering only when we want to be particularly certain that we are getting through to him. (*Ibid.*: 143)

上記(7)•(8)のように，アメリカ文化では，空間を共有する者同士は，おしゃべりを交わし，お互いに仲違いしていないことを示す必要があるが，イギリスでは，空間はお互いの障壁とはならず，心理的・内面的な壁を立てるので，同一空間にいる者もこの内面的障壁を認知するよう求められている。一方，フランス人はというと，もっと狭い空間を共有し，楽しんでいるようである。ホールは下の(9)・(10)のように観察している。

(9) According to Hall (*ibid.*: 144) French people, in general, pack together more closely than do northern Europeans, English and Americans. Mediterranean use of space can be seen in the crowded trains, buses, automobiles, sidewalk cafés, and in the homes of the

people. ... The working class and the petite bourgeoisie are particularly crowded, which means that the French are sensually much involved with each other. The layout of their offices, homes, towns, cities, and countryside is such as to keep them involved.

表 3　アメリカ人とフランス人の空間認識の差異

	アメリカ	フランス
視線	直視しない	直視
車のサイズ	大型	小型
車のスタイル	一般的	個性的
都市空間	巨大建造物	変化ある憩いの場
都市計画	格子状	星状

フランスの星状の都市計画について，(10)のような利点が考えられている。

(10) The star system in France, it is possible to integrate a number of different activities in centers in less space than with the grid system. Thus, the residential, shopping, marketing, commercial, and recreation areas can both meet and be reacted from central points. ... It is almost as though the whole culture were set up on a model in which power, influence, and control flowed in and out from a series of interlocking centers. ... The basic threads tend to be woven throughout the entire fabric of a society. (*Ibid.*: 147-8)

以上のように，アメリカ合衆国の人口を構成している主たる出身国の文化，ドイツ・イギリス・フランス，の各国文化の空間認識，スペース感覚は，人々の住空間，都市空間，ビジネス空間などの問題を取り扱う上で重要な文化的要素である。次に，日本とアラブ世界のスペース感覚を次節で取り上げる。

2．1．1．2　日本人とアラブ人の空間認識

ホール（同上）は，近接の型（proxemic patterns）の役割は，「群（むれ）

を統合すると同時に，他者を遠ざける」（“they simultaneously consolidate the group and isolate it from others by on the one hand reinforcing intragroup identity and on the other making intergroup communication more difficult.” p.149）ものであることを指摘している。

日本の江戸幕府は，徳川将軍を中心として，同心円状に大名を配置し，江戸により近い距離にある大名は，幕府により忠誠心の強い譜代大名を配し，遠隔地には，外様大名を配した。このスペース計画は，日本文化のあらゆる面に機能している。例えば，道路も，交差点に名前が付けられているが，道路それ自体には，名前がない。これは，欧米の慣習とは大いに異なる。欧米では，点としての交差点は重要ではないので，交差点に名前があるのは，風変わりな習慣である。また，日本の家屋では，茶の間の中心にこたつがあり，家族全員が同じスペースと火のぬくもり・家族の身体のぬくもりを共有する。欧米の家屋では，部屋の周辺に家具や調度品が配置され，部屋の真ん中には何もない。

アラブ人の近接感覚について，アメリカ人のそれと比較すると，大変異なっていることがわかる。

表4　アメリカ人とアラブ人の空間認識の差異

	アメリカ	アラブ
家屋の内部	しきり有り	しきりなし
ホテルの待合い	個人的空間あり	個人的空間なし
歩行中の歩行者	個人的空間なし	個人的空間あり
走行中の車両	大型車両優先	自分の車優先
広場で	自分の空間を確保	大勢で押し合う
人格の在処	皮膚（衣服）の下	身体の奥深く
侮辱	――――	エゴに到達可
身体とエゴ	一体	分離
会話中の距離（近）	耐え難い	互いの息のかかる距離
プライバシー	個人空間	沈黙
会話中	対面・非対面	対面・直視
壁で囲まれた狭い空間	個室	視界を遮る耐え難さ
境界	侵入	存在しない

アラブ人の特性について，各主体がお互いに栄養を補給し合っている土と根のようなものである，とホールは(11)のように記している。

(11) Arabs are deeply involved with each other. Their personalities are intermingled and take nourishment from each other like the roots and soil. ... Their (Arabs') way to be alone is to stop talking. (pp.158-9)

個人間の距離の取り方については，ホールは嗅覚が最重要な役割を果たしているとしている。また，アラブ人たちは，閉じた社会的体系によって人間関係を構成し，空間，スペースに頼ることはない。従って，彼らの忠誠心は，自己自身から，親戚，町の住民，部族民，同一宗教の信者，同国人に及ぶ。が，それ以外は，見知らぬ人々であり，敵である。「侵入又は侵略」(trespass)とは，スペースの境界の問題というより，「相手が誰か」(who you are) と言う問題である。このホールの指摘は，イラク，トルコ，アフガニスタンなどに於いて，現在も継続するアメリカ軍への執拗な襲撃を，異質分子を敵と見なし撃退しようとする，アラブ社会の近接性によるものがあると，見なすことができるだろうか。

アラブ社会，又はイスラム社会を概観すると，メッカ巡礼や，モスクでの礼拝に象徴されるように，巨大な空間に無数の人々が群がっている。この様子は，各部族の会合が行われるテントと，人々の集会の持ち方にも同様に見られる。大勢の群衆がぎっしりと隙間なく座し，信仰を共有し，公開で悦びや苦しみ，悲しみを共有して，踊り歌い，嘆き悲しむ様子からも，イスラム社会の近接性の感覚をかいま見ることができる。

近接性 (proxemics) は，文化によって異なる認識がなされている。このことについて，ホールはつぎのように記している。

(12) Perceiving the world differently leads to differential definitions of what constitutes crowded living, different interpersonal relations, and a different approach to both local and international politics.

(*Ibid*.: 164)

(13) ... the olfactory boundary constitutes for the Arabs an informal distance-setting mechanism in contrast to the visual mechanisms of the Westerner. (*Ibid*.: 160)

以上のように，ホールは，近接性の認知とその意味するものが文化主体によって異なり，そのことが，人々が外界を異なって認識する原因になっているとしている。同一文化及び異文化間において，人々がプライバシーをどのように保つか，どのように群れるか，群の中のエゴはどこにあるのか，などと深く係わっているとしている。この文化特有の近接性が，それぞれの地方政治のあり方を決定する要因となっているし，国際政治や，異文化間コミュニケーションにおいて問題となるところである，と指摘している。まさに，昨今の国際情勢を見るにつけ，文化の相違についての研究と理解とが益々急務となっているように思われる。

2．1．2　社会の中で育つ子供

バードウイステル（1970）は，「子供時代」の章で，「人の学びは型が形成されることである」(human learning is patterned, p.13）と指摘し，「学習することをも学習しているし，学習しないことも学習する」と指摘している。文化主体は，その主体が居住する文化圏が有するある一定のパターンを学習すると指摘している。従って，「コミュニケーションとは，人が生存する社会に順応することであり，その文化圏で生活する際に予測可能な継続性を構築するためのシステムである」(communication is that system through which human beings establish a predictable continuity in life）と定義している。そこで，ある特定の社会においては，人はある一定の行動（behavior）を，母親や家族から必然的に教わるということになる。この文化主体が生育する過程で獲得したパターン化された行動がコミュニケーションであり，音声言語を使用しない動きによるものがノンバーバル・コミュニケーションであるということになる。それは，人が産まれ育った社会特有の動きで，当該社会の構成員には有意味であるが，その社会に属さない者にとっては，無意味であり，奇異であるものであるが，人が成長するに従って，異なった社会の人々

の異なった動きに接することによって，異質な動きの意味も学習できるものなのである。

このようなノンバーバル・コミュニケーションの一端である，着衣について，日本文化の中での意味を次節で考えてみよう。

2．1．3　衣服

衣服は，人のノンバーバル・コミュニケーションの一種である。衣服を纏った文化主体は，特定の相手と意図的に，又は不特定の人々と無意識的にコミュニケーションしている。受信者は自分の視点から，発信する主体の衣服のメッセージを受け止め独自の解釈を行っている。

人の衣服には，「ことば」の機能と同様の機能がある。それらは，着衣の場面が公式か (formal) 非公式か (informal)，着衣主体と受信者との社会的関係が縁遠い (distant) か親密か (close)，の二項対立によって，図5のような解釈ができる。

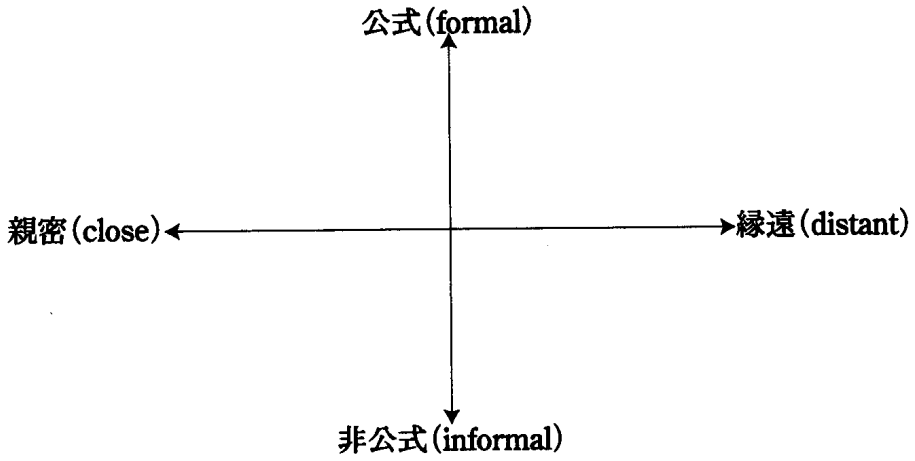


図5　衣服の機能について

人の着衣は，着衣主体とその受信者との社会関係及び着衣の場面によって分類できる。即ち，大学の卒業式のような公式な場面では，着衣も公式な衣服，ダーク・スーツやドレスとなり，ダーク・スーツを身につける人は，受信者とは社会的又は場面的に疎遠な関係にあり，多くの場合，式場で着席する場所も離れている。発話者は受信者に対して，いわゆる「読みの標準語」と言われる言語スタイルで式辞を述べる。が，場面が家庭に変わると，ダーク・スーツから普段の家庭着に着替え，発話者たちの社会関係も親密となり，

着席する場所も隣接し，同時に，ことばも家庭語に「着替え」，省略が多く，親密な人々にのみ理解できる「くだけた」ことばを用いる傾向がある。このような変化を図6で示す。

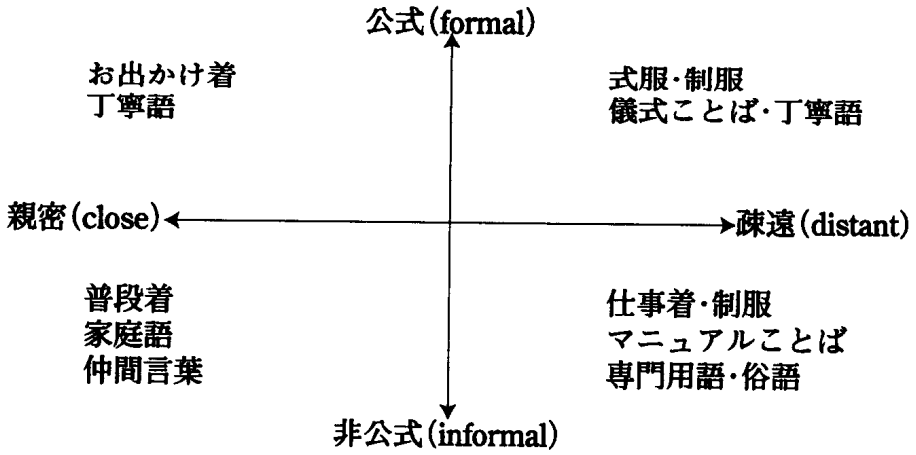


図6　着衣の変化と発話スタイルの変化

上図6は，日本文化主体のノンバーバル・コミュニケーションである，着衣の変化と言葉のコミュニケーションスタイルとの相関関係を，公式・非公式，及び疎遠・親密という縦軸と横軸を基準として二次元に区分けしたものである。それぞれの軸で分けられた4つの領域で，ノンバーバル・コミュニケーションとバーバルなそれとはそれぞれの特性を共有している。即ち，文化・言語主体間の親密さの度合いによって，親密さを表現できる生活の場面とそれが許されない社会的場面との間で，区分けされている。この親密さの度合いは，発話のスタイルに大きく関与し，公式的発話スタイルと非公式的親密なスタイルとに区分けされ使用されている。いわゆるレジスター(register)という社会的言語変種は，ノンバーバルなものを伴って使用されていることが分かる。

次章では，異文化間のバーバルなコミュニケーションスタイルについて考察したい。

3．異文化間バーバル・コミュニケーション

私たちを取り巻く現代社会は日常的に地球規模の課題を抱えて動いている。

地球環境，異常気象，食料不足，超高速輸送手段や同時情報交換などによるウイルス・疫病・テロなどの拡散など，私たちの日常生活は便利になったと同時に，危機的にもなっている。

このような21世紀社会に生活する人々は，日常的に国際的コミュニケーションを余儀なくされ，極普通の一般生活者の周辺で，異文化・異言語の人々が地方の社会共同体の中で相互にコミュニケーションしている。このことは，従来，異民族の往来・接触・共生が一般的ではなかった地方においてでさえ，多文化共生社会の異文化間コミュニケーションが要請されている。本章では，このような異文化間コミュニケーションにおいて重要な課題となる，文化による話し言葉のスタイルの相違に注目し考察する。

3．1　話し言葉のスタイル

異文化間のコミュニケーションにおいては，異なった文化的背景をもつ人々が，それぞれの言語的習慣をなるべく良く理解していることが，誤解を防ぐ方策の一つである。そこで，やや一般化し過ぎるきらいをまぬがれないが，特定の文化集団に特有であると考えられる話し言葉のスタイルを考察したい。このような談話スタイルは，ノンバーバル・コミュニケーションに見られる文化特有な型のように，個人が不規則に習得しているというよりは，一定の宗教社会文化共同体に共通する特定の型があると考えられる。日常的に身近に生活する同一共同体の人々は，相互交流の際に積み上げていった同一の経験から，発話の解釈のための一定の型（schema）を共有している。

従来の社会言語学的研究から明らかになっている語用上の事実は，「話し手は，会話の参加者と会話の場面によって，発話のスタイルを変える」，ということである（cf. Holmes, 1992; FitzGerald, 2003）。このために，話し手は，第一言語を獲得するのみならず，幅広い社会言語的言語変種（register）と宗教社会的談話スタイル（speech style）を同時に獲得していくのである。第一言語では，豊かに獲得できている言語変種でも，第二言語では，その習得過程や使用状況が制限されたものであった場合，その言語変種も制限されたものになる傾向がある。

本稿では，世界語となった英語でコミュニケーションする場面での，異文

化間コミュニケーションの談話に現れた文化的特徴に注目したい。時として，それらの英語によるコミュニケーションは，「日本語英語」(Japanese English)，「シングリッシュ」(Singaporean English) のように称され，会話の参加者の性・年齢・民族・教育・居住地域・職業などの要素が関与する，特徴ある談話スタイルを生み出している。

グッドイナフ (Goodenough, 1981) によると，「社会的文化」を(14)のように，「社会文化主体が，その所属する社会で受け入れられるために知っていることである，信じていることである」と，定義している。

(14) A society's culture as consisting of whatever it is one has to know, or profess to believe, in order to operate in a manner acceptable to its members in every role that they accept for anyone of themselves. (*Ibid*., 191)

更に続けて，ある共同体の文化は，生物学的種に類似したものであるとしている (a group's public culture is similar to a biological species)。このことから，文化と民族という二つの要素を考慮に入れて，オーストラリアやハワイのような西洋と東洋とが出会う地域で，社会の共通語である英語でなされる談話の資料を収集し分析してみたい。

多少短絡的であるとは思うが，談話資料の分析枠組みを形成するために，二極対立的枠を仮定したい。即ち，欧米の文化は，個人主義的で低い文脈を有し (individualistic and low-context cultures)，東洋の文化は，集団主義的で高い文脈を有している (collectivist and high-context cultures) であると仮定する (FitzGerald, 2003: 136)。「文脈」(context) とは，聞き手が解釈する際に，解釈の手がかりを提供する会話の場面や社会文化的前提のことであり，「高い文脈」とは文脈への依存度が高いこと，「低い文脈」とは，それが低いことを意味する。この仮定に基づいて，次に引用する談話資料を談話構成の観点から考察したい。

(15) 最近オーストラリアに移住したアジア系シン (Singh) とオーストラリ

ア人ジョン（John）とによる会話で，トピックは，学校教育で取り上げるべき外国語について論じている（*Ibid*. 89-90）。資料の各行はワード・グループ（word group）を表している。

S: I think in the area er
Japanese er Mandarian language
is quite popular
J: (quietly) Yer
S: and as er the conditions today
I mean conditions regarding employment
if our boys know Mandarin or Japanese
they can converse over the adjoining countries
and boys who want to do business with these countries
they can have better prospects
J: Mm hm
S: or errr er the fellows who want to
have a job in these areas
because there would be
a lot of development in these areas now
J: Definitely
S: So
J: Definitely its certainly
very good for the economic climate isn't it
S: Yes I think Arabic can be dropped
there is not much problem
J: (surprised) Arabic
S: Yes
J: I don't think that's
particularly popular at the moment, is it
S: Yes that's what I'm saying
it should be dropped

上記(15)の対話では，アジア人のシンは，自己の主張を明確に提示していない。その代わりに，日本語又は中国語の必要性について，その種々の理由を先ず長々と枚挙している。この談話例に見られるように，アジア人の談話では，明確な主張がなされず，主張の背景にある具体的事例が細かく述べられる傾向がある。次の事例（*Ibid.*: 91-92）でも同様な傾向がシンの発話に観察される。

(16) S: What did you say
J: By axing a few teachers
it means that the budget
can save quite a lot of money
S: er ... thing is ...
you are teaching thirty students at a time
and second case you are teaching
forty or fifty students at a time ...
the thing is, are you able to ...
justify ... the teaching ...
are you able to look after
all the fifty students
I think some of the students will be ignored
J: So let me see, you're suggesting
that er we don't cut the number of ...
S: Don't decrease the teacher taught ratio
from one is to thirty
to one is to forty
to one is to fifty
J: But you
S: We don't increase that
J: But you at the same time you don't want
to cut the number of hours of people teaching

so there's no way for the budget to save any money
because you want both sides of this argument
so basically the final points are about either
ONE cutting the number of hours of
either core subjects or physical education or
SECOND cutting the number of teachers
so it has to be one or these
and there it can't be both

S: (Sure?) I think er er these maths teachers
I'm told they finish their course ...
quite well in advance
... in a semester of four months...
... they finish their syllabus
in first two months
they are doing revision work
so I'm suggesting ...
they reduce the number of working hours
by thirty percent

上記(16)の談話例で，シンは再び，具体的事例の説明を行っているが，教育予算を節減するための明確な提案には至っていない。これとは対照的に，ジョンは予算削減の具体案を二つ挙げ，'ONE cutting the number of hours ... SECOND cutting the number of teachers ...' いずれかであると，明示的に述べている。

以上(15)・(16)の発話例では，シンは長々と理由を述べるのみで，結論を明示しない談話を展開している一方，話し相手のジョンは，結論を明示的にしている。

もう一つの談話スタイルの例として，次の宣伝広告を挙げてみたい。

(17) 2003年9月30日，日本経済新聞に掲載されたFUJITSUの広告である

(紙面では縦書き)。

大事に使ってきたパソコンなので,
大事に生まれ変わらせてあげたいのです。

10月1日から全国で始まる家庭用パソコンリサイクル。
富士通は,使われなくなったパソコンの回収・再資源化を積極的にすすめることで,限りある地球資源のリサイクルを進めていきます。

「パソコンのリサイクルなんて当然やわ。そんなん,とっくに行われたと思ってました。」ときっぱり語る二階堂寿江さん。彼女は,兵庫県の山あいで染色工房を営みながら,染色のことや身のまわりの素材のこと,豊かな自然のことを瑞々しく紹介するホームページ「染や織や」を主宰しています。
「何気なく捨ててしまう栗の渋皮って,実はとても美しい色で布を染め上げるんです。すごい,と思ったらもったいなくて捨てることなんかできませんよね。」自然のものをとても大切にする姿勢に,富士通はリサイクル活動で応えます。
10月1日から全国でいっせいにスタートする家庭用パソコンリサイクル。富士通では,パソコンの回収のためにホームページと電話による受付専用窓口を設置し,簡単にお申し込みいただける体制をつくりました。大事にお使いいただいたものですから,再資源化施設では,ひとつひとつの部品を貴重な資源として,ていねいに取り外します。自然を大切にしたいと願うお客さまの想いにお応えするために,私たち富士通は,人と地球が調和する資源循環型社会づくりに力を尽くしていきます。これからスタートする家庭用パソコンのリサイクル活動に,ぜひご協力をお願いいたします。
(10面全面広告,工房「NIKAIDO」・「染や織や」,二階堂寿江さんがノート型パソコンを小脇に抱えて,染め物を背景に立ち姿で大写しになっている写真の脇と下に位置する広告記事)

(17)では，太字の広告で情報を明示的に伝達している。が，宣伝の説明文を見てみると，先ず，二階堂寿江さんが自然のものを日常的に大切にして捨てたりせず，仕事に役立てている具体的事例が先行し，後半で，広告の趣旨が明示的ではあるが，柔らかい口調で述べられている。「自然」・「もったいない」・「大事」というキーワードを繰り返すことによって，自然環境を大切にする再資源化・資源循環型社会づくりに寄与する会社の姿勢とその方法が，婉曲的に帰納的に伝えられている。

この広告宣伝の例においても，「栗の渋皮」を染色に利用せずに捨てるのはもったいない，という具体例から本題へ，という談話構成がなされており，(15)・(16)のシンが，具体的事例を長く述べ，結論を推論させる帰納的談話スタイルを使用していることに通じるものがある。

次に，談話スタイルとして，話し手の順番 (turn-taking) について考察してみたい。

(18) 下の談話は，4名，Asmahan (A) は中近東の女性，Yolanda (Y) はラテンアメリカの女性，Doai (D) は東南アジアの男性，Jack (J) はオーストラリアの男性，が自由な会話を交わしている。資料中のxは不明瞭な発話を示す。

J: I've worked all around Australia
I've worked as a stockman
D: You x stockman
J: Stockman which is like cowboy
D: Cowboy
A: Ahh
J: But worked up'n the Northern Territory mustering cattle
D: cattle
D: horses?
J: Yes yes with horses
Y: like horses
A: I love horses yes

Y: I used to ride
A: I said to my husband
I want to go somewhere and
but he didn't know
and want to go
D: But did you ride a horse
J: There's a place
A: No I would like
Y: I ride it once (FitzGerald, 2002: 115-6)

⒅の談話では，参加者4名全員が会話に参加し，発話は調子よく順番に交替している。会話が気持ちよく交わされている様子が伺える。次に，ある特定の個人が発言権を独占する事例を挙げる。

⒆ Retana (R) ラテンアメリカの女性，Budhasia (B) 南アジアの男性，Ljubica (L) 東ヨーロッパの女性の3名が会話をしている。

R: I think we don't have
enough information about
what have we done to to
avoid the situation
I mean psychologists or counselors at schools
we don't know what they are doing to to
avoid the situation in schools
which kind of work
they are doing with the boys
B: x x x
R: counseling and psychology you know
I don't think we have enough er information
B: x x x
L: x x x

R: to decide about the situation
we have just factors here and percentages
not information enough
we have x x x on the other hand (*Ibid*., 126)

(19)の例では，Renata が発言権を独占し，他の 2 名は聞き手にまわっているので，会話が成立していない。

日本の政治討論会(2003年11月10日，19：30～20：00，NHK 総選挙直後の特別番組）においても，女性の幹事長は発言を遮られ，その発言は他の男性幹事長らの発言よりも時間的に短くなった。この事例のように，発言権の順番取りの問題は遮りと深い関係をもっている。男女の発話者間での発言権及び遮りの問題は，既に取り上げたので（石丸，1999)，ここでは割愛する。

以上の発話事例から観察できることは，アジア（中国や日本など）では，具体的事例が先行し，明確な主張が行われない談話スタイルを有し，オーストラリアの英語母語話者の文化に於いては，論点と結論を明確にする談話スタイルを有していることが分かる。即ち，談話の文脈から結論を推論することを求めるシンの談話は，高文脈依存型であるといえる。

次章では，異文化間コミュニケーションのもう一つの具体的資料として，ハワイにおける，観光客と地元観光従事者とのコミュニケーションを取り上げる。

4．ハワイ州ホノルル観光産業における異文化間コミュニケーション

本章では，ハワイでの観光産業従業員と観光客との共通語による異文化間コミュニケーションを取り上げ，英語の発話に見られるコード・ミクシング(code mixing)，単純化（simplification）やジェスチャー（gestures）の使用例を観察し，現地の産業従事者と観光客とのコミュニケーションの実体を考察する。

現代社会では，観光産業に従事する人々は，地域を問わず，職場であらゆる機会に異文化間コミュニケーションを実施している。ここでも，共通語は

英語である。

資料収集時期：2002年９月１日～５日。
観察場所：ホノルル，ワイキキ地区のレストラン。
観察記録：

⑳ 2002年９月１日

(a) Hostess: Two? [with two raised fingers toward the entering Japanese guests]

(b) Waitress: You finish? [coming to collect dishes with left-over to the Japanese guest's table]

(c) Hostess: Hi! Nice day! [followed by nice warm conversation to American white guests]

(d) Cashier: If she go come,... [to her co-worker in the same fast food shop]

(e) Japanese tourists show something written to an Asian American hostess. Both Japanese guests and the hostess seemed to understand each other and they parted.

(f) Most of shopkeepers, sales people at souvenir shops, tour guides and bus drivers can speak some Japanese, which enables them to communicate with their Japanese customers.

(g) Those people who can speak some Japanese can speak set phrases. Though unnatural, they make sense with Japanese customers.

次の資料収集計画：

(h) Future comparison between Hawaii and Lankaui in Malaysia: It may be interesting to see the differences in hospitality between Malaysian and Hawaiian. Both white and Asian Americans in Honolulu seemed to be rough in their manners.

(21) 2002年9月2日

(i) Hawaiian tourist industry employees mix codes and switch codes of English and Japanese. They, however, choose to use Japanese for important crucial information, but use English for additional and complex information.

(j) The Japanese speech spoken by Japanese Americans showed these characteristics:

(ア) Intonation of the Japanese speech was flat.

(イ) Nouns were repeated.

(ウ) Polite forms were used.

(エ) Most of the utterances were made of simple sentences.

(オ) Misuses between active voice and passive voice with the word 'mitsukeru' (to find something) and 'mitsukaru' (something was found) were found in their utterances such as, 'Captain cook found Hawaiian Islands.' '*kyaputen kukku ga Hawaii wo mitsukatta toki.*'

(22) 全般的観察：

(カ) There are various generations of immigrants working in tourism industry in Honolulu: Second generation of Japanese immigrants, local Japanese, and other nationalities such as Philipinos, Koreans, and Chinese.

(キ) Economical power over language: In Honolulu, most of the tourists are Japanese. Their money spent in Honolulu supports the lives of the working people there. They choose to use the customers' language, Japanese, for their living. In the present world, America is the most powerful country in terms of economy, which dominates the world to learn and communicate in English across cultures. But locally the dominant economic power decides the choice of language used in the area in question.

In Honolulu, Hawaii, it is Japanese that is economically most powerful, and the people who deal with Japanese people speak their customers' language.

以上の資料から，ハワイ州ホノルルの観光産業従事者と観光客との間の英語やジェスチャーによる異文化間コミュニケーションには，以下の特徴が観察された。

① 共通語は英語である。

② 簡略化（simplification）がおこなわれる。

③ 現地従業員は，日本人観光客に対して基本的に日本語を使用するが，日本語で表現できない場合，英語とのコード・ミクシング(code-mixing)が生じる。

④ 現地従業員が日本語で表現できない場合，指で数字を表すジェスチャーを用いる。

⑤ 現地従業員は，日本人観光客と会話を交わさないが，英語を共通語とする白人の観光客とはにこやかに会話する。

⑥ 現地従業員の英語及び日本語には，文法の簡略化が見られる。

本研究は，その緒についたばかりであるので，本論においては，極一部のノートしか発表できないが，他の観光地での異文化間コミュニケーションの資料収集を継続する。また，日本に一時滞在している留学生などが，日本人との会話において理解しがたい会話の緩衝表現，例えば，「すみません」や「また連絡します」などについて研究する。さらに，日本人にとって不可解な行動，例えば，一人を招待しても，3・4人一緒に連れ立って参加する，という仲間意識についても，文化的背景から研究を進めたい。

5．まとめ

本論では，いきもののコミュニケーションの一部を研究した。フォン・フリッシュ(1976)のミツバチの研究を紹介し，次いで，人のコミュニケーションについて，主として異文化間コミュニケーションにおいて，非言語的媒体

によるものと言語的媒体によるものとの双方を研究した。このような研究の結果判明したことは，以下の点である。

(a) ミツバチのコミュニケーションには規則的な構造がある。

(i) ミツバチのダンスには伝達の構造が複数あり，それに対応する情報を仲間のミツバチに伝達できる。

(ii) ミツバチの社会にも地域差があり，地域や種の差によってコミュニケーションの型が異なっている。

(iii) 地域差や種の差のあるミツバチも相互に理解し合える。

(iv) ミツバチのコミュニケーションは本能的，生得的なものである。

(b) 人のコミュニケーションには規則的な型がある。

(i) ノンバーバル・コミュニケーション及びバーバル・コミュニケーションのいづれにも地域宗教社会文化的差がある。

(ii) 同一共同体に属する言語文化主体は，同一グループの他の構成員とコミュニケーションの型を共有している。

(iii) 異文化間コミュニケーションの際に，異なった談話スタイル，高文脈型と低文脈型が東洋人の談話とオーストラリア人の談話にそれぞれ顕著に現れた。

(iv) 異文化間コミュニケーションの際に，共通言語である英語が，会話の参加者にとって媒体として十分に機能しない場合に，ジェスチャーが用いられる。

(v) 共通語が発話者の目標言語である場合，簡略化 (simplification) が観察される。この現象は，日本語が目標言語である場合及び英語が目標言語である場合の双方において観察された。

本論は，コミュニケーションを取り巻く諸課題の一部を取り上げ研究した。異文化間コミュニケーションは，現代社会が抱える大きな課題の一つであるので，更に異文化接触の現場に足を運んで観察し，資料を収集したい。

参考文献リスト

Akmajian, Adrian *et al.*, *Linguistics: An Introduction to Language and Communication*, Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1979.

Birdwhistell, Ray L., *Kinesics and Context*, Essays on Body Motion Communication, Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1970.

FitzGerald, Helen, *How Different Are We?* Spoken Discourse in Intercultural Communication, Clevedon: Multilingual Matters Ltd., 2003.

Goodenough, W.H., *Culture, Language and Society*, 2nd ed., California: Bejamin/Cummings, 1981.

Hall, Edward T., *The Hidden Dimension*, Doubleday and Company Inc., 1969.

Holmes, Janet, *Introduction to Sociolinguistics*, London: Longman, 1992.

石丸暁子，『コミュニケーションの諸相』，九州大学出版会，1999.

野村雅一，『ボディーランゲージを読む』身ぶり空間の文化，平凡社，1994.

Sladen, F.W., A scent-producing organ in the abdomen of the worker of *Apis mellifera, Entomol, Monthly Mag*. 38, 208-211, 1902.

Spitzner, M.J.E., *Ausfuhrliche Beschreibung der Korbbienenzucht im sachsischen Chrukreise, Ihrer Dauer und ihres Nutzens, ohne kunstliche Vermehrung nach den Grunden der Naturgeschichte und nach eigener langer Erfahrung*, Leibzig, 1788.

Unhoch, N., *Anleitung zur wahren Kenntnis und zweckmassigsten Behandlung der Bienen*, Münich, 1823.

Von Frisch, Karl, Über die "Sprache" der Bienen, eine tierpsychologische Untersuchung, Zool, Jb., *Physiol*, 40, 1-186, 1923.

von Frisch, Karl, (translated by Leigh E. Chadwick), *The Dance Language and Orientation of Bees*, Cambridge, Mass: The Belknap Press of Harvard University, 1967.

Von Raffler-Engel, Walburga (ed.), *Aspects of Nonverbal Communication*, Bath: The Pitman Press, 1980. 本名信行他（訳），『ノンバーバル・コミュニケーション』大修館書店，1981.